

くらし

夢再び

モンゴル恐竜調査隊

石垣 忍

調査隊員たちの皮膚を焼き焦がした太陽が地平線に沈むと本当にほっとする。ゴビ砂漠の8月は夜の9時ごろが日没で、そのころには夕餉は済み、その日の野帳(調査現場で記録したメモ帳)の整理も終わっている。風のない日の夕暮れ時、私はたいてい西に向けたディレクターチェアに深く腰をおろし、空を眺めることにしている。ビールや、アルヒというモンゴル産のアルコール度の高いウオッカがあれば、至福の時間となる。

夕暮れ時はまぶしくないので空をゆっくり眺められるのが良い。そういう時の空には、ほうきで掃いたような巻き雲をよく見かける。大陸の雲は日本で見る雲とは少し違い、によきによきと上に積み重なるような雲はあまり見ない。やがて西空のあかね雲がその輝きを失うにつれ、日に焼けた皮膚の灼熱感も消えてゆく。夕闇は癒やしである。砂漠がある国の国旗に星や月が配されるのも納得がいく。だんだん暗くなってゆく空を見てみると徐々に星が姿を現す。ゴビの夜は都会のような娯楽はないが、空を見ていると飽きることがない。星空観望は砂漠の醍醐味である。

⑭ 水星、人工衛星、そして流星

星空観望は砂漠の醍醐味

砂漠のいいところは天体の位置と気象条件が良ければ夕暮れ時に水星が見えることだ。水星は太陽に近いため日本では山や木立、建物に邪魔されてほとんど見ることがない星だ。西の地平線の上、太陽の残光の中に水星が見えるところにかく

い星が三つもそろい踏み。これもゴビ砂漠の夜が調査隊員にくれた今年のプレゼントと思っておこう。もう少し暗くなると人工衛星が目につくようになる。日没後の空を光の点がゆっくりと移動していく。夜空に同時に数個見られることもある。光が点滅する夜間飛行の航空機とは簡単に見分けがつかず、人工衛星の明るさや進行方向、空を渡る速度はさまざまにぎやか。本格的に暗くなるまで目を楽しませてくれる。

間が濃くなると、ひととき美しいのが流星だ。実は調査シーズンの8月はペルセウス座流星群の季節でもあり、流星の数は大変多い。中には流れた後に光の筋が残るものや、数秒間にわたって輝いて砂漠の景色が一瞬だけ青白く浮かび上がるほど明るいものもある。後者のような流星はまだ一度しか遭遇していない。

そんな明るい星はいつ流れるか、いつ流れるか、と思いつながら待つうちに、だんだん眠くなり、やがて睡魔に勝てなくな



こうして私は眠りに落ち、またあの体を焼き焦がす太陽と再会する日の出まで、優しい闇に包まれてゴビ砂漠の夜を過ごすのである。

(岡山理科大教授)

夕暮れ時の西空。大陸的な雲が太陽の残光に照らし出される。

随時掲載